

関住協だより

～～～役員向け～～～

事務局通信 2017

第169号 (2017年11月)

NPO 法人

マンション管理支援の関住協

〒542-0081 大阪市中央区南船場1-13-27アイカビル4F
(06)4708-4461 FAX(06)4708-4462

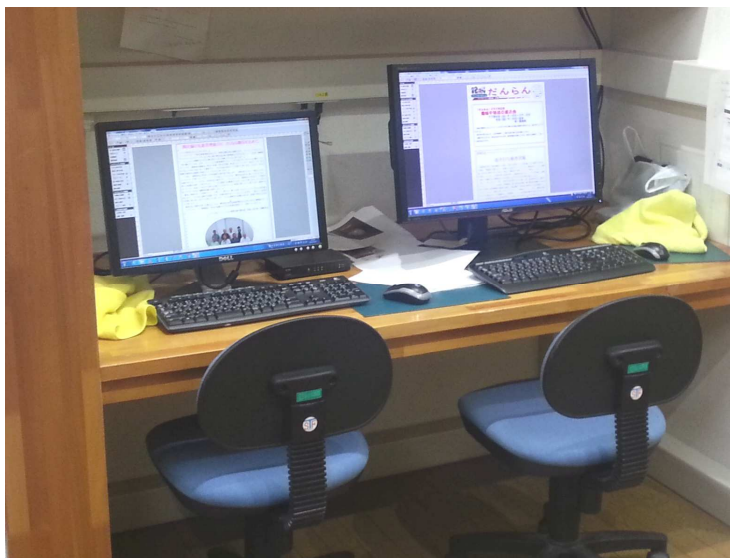
ホームページ <http://www.kanjyukyo.org/>
メールアドレス jim@kanjyukyo.org

うちのマンション
ここが自慢

1000号を目指して

―――広報紙「だんらん」250号に到達

ファミリートーク新北島管理組合法人



住之江区のファミリートーク新北島の広報紙「だんらん」が250号を迎えました。管理組合創設時から広報紙の必要性を感じながら、手が出ないままにいました。有志が立ち上がり、創刊は1996年6月。1998年には、町会役員も含め編集委員会の体制も整い、月1回の定期発行に。

管理組合と町会との共同広報紙になっています。当初は「ファミリートーク新北島広報紙」としていましたが、愛称を募集したところ20～30の応募があり、「だんらん」と

命名しました。いわれは、ファミリートークの意識であり、「家族団らん」を意味します。

初期はA3、2ページ、ワードで作っていたので編集に難がありましたが、編集ソフトを導入してからは短時間で作業が出来、事前準備さえできていれば、2～3時間で編集から印刷までできるとのこと。なお、ここは205戸の大規模マンション。自前でパソコン数台（うち、編集用2台）、印刷機も持っています。

「だんらん」はマンションのエントランスでも、モニターで見ることができるとともに、管理組合のHPにもアップしており、外部の人も見ることができます。また、第1号から保管をしている人もいたなど、今はすっかり定着しマンション住民にとって重要な情報源となっています。

これからの課題として、次世代につなぐこと。これはマンションの管理活動にとっても同じ。自分も作り手に回りたいと思われるような広報紙にしたいと、ある編集委員は語っていました。「広報紙を作っていないところ、広報紙づくりを管理会社任せにしているところは、ぜひ自力で作ってほしい。そうすればマンション管理の力量も増すだろう」と、別の編集委員の方は語っていました。

「だんらん」1000号、マンション100歳は壮大な目標だが、決して不可能な「夢」ではないと口を揃えて強調されていました。

住宅宿泊事業法(民泊新法)への対応について

住宅宿泊事業法が、来年6月15日から施行されますが、それに先だって同年3月15日から、住宅宿泊事業を行おうとする者から都道府県知事（政令指定都市・中核市等の保健所設置市、東京23区）への届出の受付が開始されます。

従来からの旅館業法や戦略特区による民泊と異なり、住宅を対象とした制度であることから、管理規約に「専ら住宅として使用するものとし、他の用途に供してはならない。」の規定を置いているだけでは、禁止することは出来ないこととなります。

制度の詳しい内容や対策については、次号以下の「関住協だより」でお知らせしますが、取り急ぎ、各管理組合におかれては、早急に民泊を容認するか否かの方針を決定し、民泊禁止の方針を採る場合には、遅くとも来年2月までに理事会で、「当マンションでは、専有部分を住宅宿泊事業法第2条第3項に規定する住宅宿泊事業に使用することを禁止すること」「2018年〇月に開催予定の通常総会において、民泊を禁止する旨の規定を管理規約に盛り込む規約変更の決議を行う」ことを決定し、理事会議事録を作成して下さい。そして、この理事会決議を周知徹底するために、組合員及び占有者に広報紙等の文書で、3月上旬までには上記の理事会決議の内容を知らせて下さい。

ハトのフン公害をどう防ぐか

——関住協への相談から

“平和のシンボル”といわれているハトですが、その一方で、ところかまわず糞やダニ、羽根をまき散らし、どこにでも巣をつくり卵を産み繁殖します。ベランダや洗濯物を汚されるなどに対する怒りがあるのが実状であり、関住協にも何かいい方法はないだろうかとの相談がありました。専門家の意見も聞いて、回答した内容を紹介します。

人の身勝手か、増加するドバト

ドバトが増加した原因はいくつかあります。

ドバトは旺盛な繁殖力を持ち、ほぼ一年中の求愛行動で繁殖しています。

また、伝書バトのレースなどで一着以外は帰巢しなくてもよいので、イベント等で放鳩されたものが、野生化しているなどがあります。

都市での繁殖の最も多い原因は、ヒトによる給餌です。さらに、これといった天敵がないのも増加の要因の一つではないか、という専門家もいます。

ハトのフンにご注意——奇病のもとのカビが

ハトのフンには、死亡率の高い奇病「クリプトコックス症」の原因とされるカビの一種「クリプトコックス・ネオホルマンズ」が存在します。気管を通じ肺で初期病巣をつくり、さらに血管を通して、最終的に脳を侵し脳を海綿化させ、命を奪います。年間数十人が発症しています。治療薬の開発は進められていますが、特効薬はないといわれています。

広島市のハト対策の試み（成果事例）

毎年8月6日の原爆忌に、平和の象徴として1,500羽の伝書バトが放たれる平和記念公園、大空へ舞いあがったハトは次々飼育舎へ戻っていくが、戻らないハトが野生化したりしています。

広島市のドバトは1992年に市街地で調査したところ、約7,600羽に膨れ上がっていました。市動物管理センターによると、ハトのフンや羽根が公園のベンチや道路、マンションのベランダに飛散し、農作物への被害など、地域住民からの苦情が相次いだそうです。ヒトが食パン1枚(約60g)をエサとして与えるとハト2羽の1日分の食事となり、約34gのフンが出る計算になるそうです。「野生動物にエサを与えることは生態系のバランスを崩し、動物のためにならない」と強調しています。

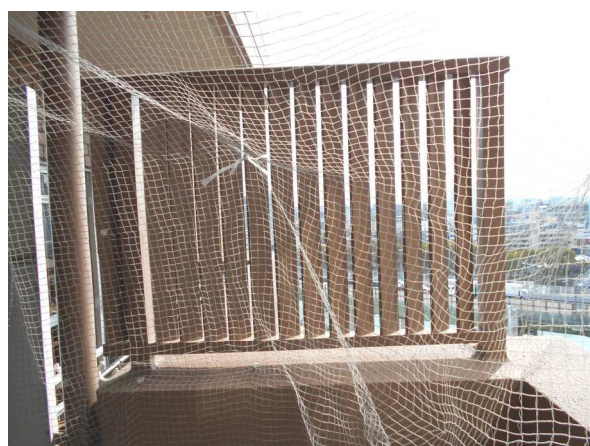
広島市は「ハト対策検討委員会」を設置し、「エサ減らしや繁殖抑制手術、飛来防止器具の貸し出しなどを柱とする、5カ年計画」をまとめ、実施しました。その結果、市内のハトが激減。これは25年前の広島市の取り組みです。

あるマンションの取り組み…鷹を使ったハトの防除対策

大阪郊外のあるマンションでは、鷹を使ったハト防除対策をしていると聞きました。屋上から小鷹を飛ばし「“近寄ってはいけない場所”という認識をつけるため継続して行う」というものです。それまでは「業者に頼んでフンの掃除をしてもらっていた。400万円ほど使った」そうです。鷹を釣ったハトの防除対策では、費用はほぼ1年で、17回52万8千円余。「完璧に来なくなるなんてあり得ないので、その辺は割り切って考えているが最近ではほとんど見えなくなった。経費はかかるがそれも必要経費だから」とのことでした。

ハト公害の減少のために

- ① ハトはカラスのように、ゴミ袋からエサを漁ることはできません。エサを与えないことが大きな決め手になります。その時に、スズメや猫などにも一切エサは与えないことが大切。猫などが食べ残したものがハトやカラスのエサにもなります。「野生の動物にエサを与えることは生態系のバランスを崩し、動物のためにならない」ことを心すべきで、給餌している近隣の住民にも、クリプトコックス症のことを話し、協力を求めることが必要です。
- ② ハト除けの剣山のようなものを設置するのも有効。(左写真)
- ③ ピアノ線などを可能な限り張ることも有効です。
- ④ 気が付けば追いはらうこと。
- ⑤ ハト除けネットを張る。(右写真)
等があります。



②・③・⑤は共用部の改良工事になるので、管理組合でよく話し合い、工事業者等に相談することも必要です。

「ハト公害の減少の取り組みは、地域全体や行政も巻き込んで継続した取り組みが必要」と思います。地域でのハト対策は、エサを与えないことが一番です。

※ ハト公害についての取り組みなどがあればご一報ください。これからも役に立つ情報、経験を紹介していきたいと思っています。

西年に因んで⑨

タカの渡り

秋空を見上げると次々と現れるタカ、そして上昇気流に乗って旋回しながら高度を上げ去って行くタカ。一日に数百羽、多い時には数千羽と渡って行く日もあります。一度でもそのような光景を目にすると、毎年秋が待ち遠しくなります。

渡り鳥の多くは、気温が安定している夜に渡りますが、タカは上昇気流を利用して旋回上昇し、飛翔高度を高くしてから滑空していく省エネ飛翔法を取っているため、昼間しか渡りません。従って、雨が続きたり、台風が来ると上昇気流の発生がなく渡りませんが、天気が回復すると、その代わり滞留していたタカが一斉に飛び立つので、一日に数千羽も渡るようなことも起きます。上昇気流の発生するところにはタカが集まって来るので、タカの観察ポイントとなります。そして、タカ渡りのルートは大きく分けて、伊良湖岬ルートと白樺峠ルートの2つがあります。伊良湖岬ルートは1186年9月下旬に西行法師、それから500年後に松尾芭蕉が訪れ古くからタカが渡ることが知られていたようです。近年では1972年の秋、沢山のサシバが西へ向かって飛んでいるのが目撃され、それ以来タカ渡りのポイントとして注目されるようになりました。白樺峠ルートは、白樺峠のある長野県南安曇郡奈川村では、「たくさんのタカが南西に飛んで行くのが見られるようになれば稲を刈る」という古くからの言い伝えがあったようで、信州でもタカが飛ぶ筈と小さな情報をコツコツと積み重ねた結果1989年に発見されました。

白樺峠ルート金華山（岐阜）から猪子山（滋賀）、岩間山（京都）、高槻の萩谷公園、箕面の聖天展望台を通り、サシバは六甲山の途中兵庫県須磨区近辺から淡路島を縦断、鳴門から四国を横断して、九州に入り金御岳（宮崎）から南下して南西諸島、台湾、フィリピン等で越冬します。ハチクマは六甲山から西下して福江島（五島列島）から

700キロの海を渡り上海近辺に上陸し、海岸沿いに南下してマレー半島からインドネシアに渡り越冬します。伊良湖岬ルートは日の岬（和歌山）から鳴門経由四国を横断、サシバは金御岳方面へ、ハチクマは九州を横断して六郎次山（熊本）から上海方面へ向かいます。



一番数の多いサシバ、ハチクマ（ハチクマの比率は1～2割）は9月～10月に渡りますが、ピークは白樺峠ルートでは9月下旬、伊良湖岬ルートは10月上旬と若干のズレがあります。

大阪府下では聖天展望台と萩谷公園が観察ポイントですが一寸遠くを飛ぶので、視力の弱った高齢者には厳しいものがあります。筆者も2013年からは彦根の手前の猪子山で観察しています。猪子山の利点はJR能登川駅から頂上まで徒歩40分くらいで、そんなに高い山ではありませんが、タカは鈴鹿側と琵琶湖側、そして上空も飛んでくれ、たまには近くを飛んだり、近くの木に止まってくれることもあります。そして、白樺峠のあくる日に通過して行きますので、沢山飛ぶ日の見極めがつけやすいことです。

みなさんもホークウォッチャーになりませんか。

日本野鳥の会 大阪支部支部長 松岡三紀夫